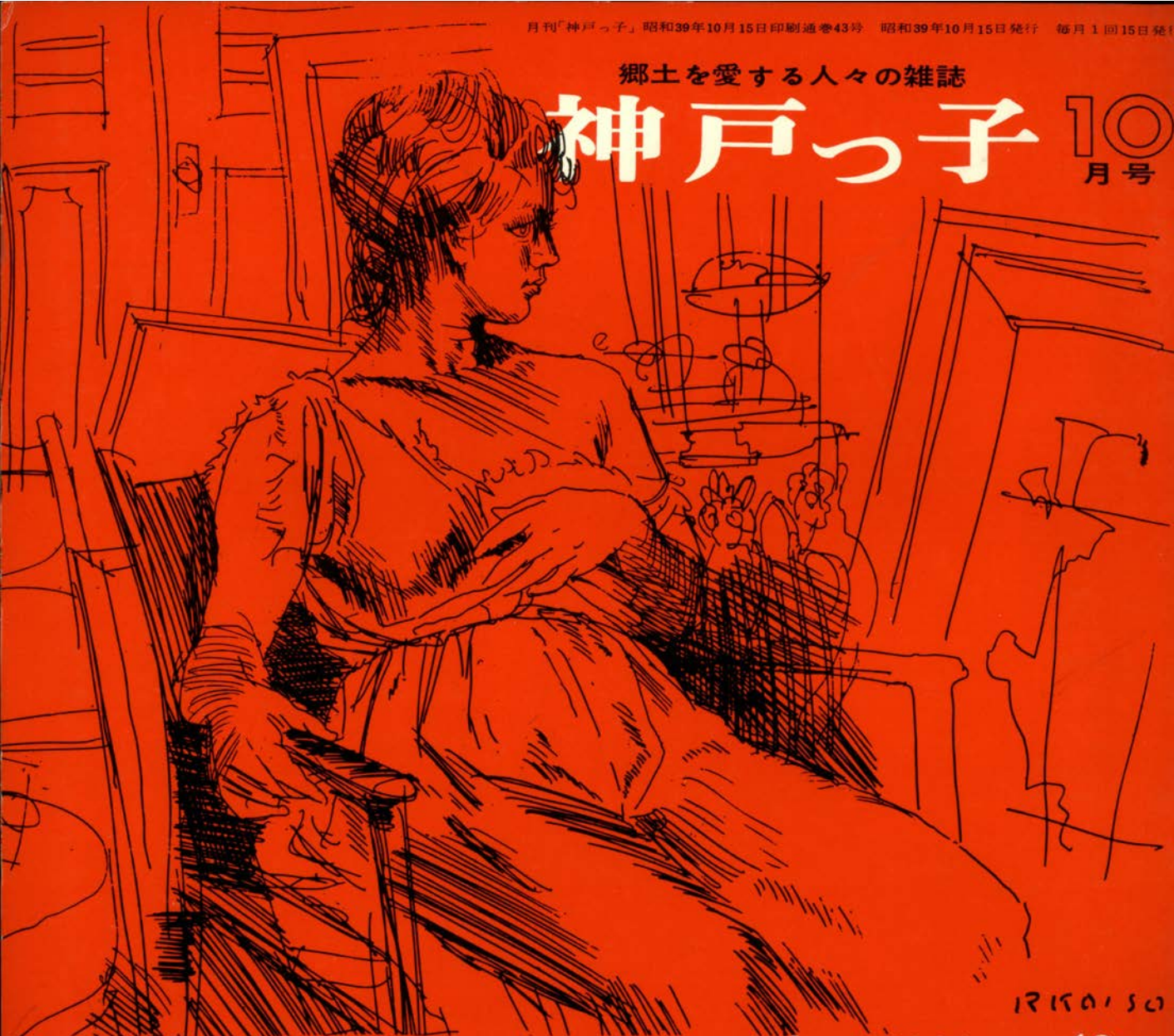


月刊「神戸っ子」昭和39年10月15日印刷通巻43号 昭和39年10月15日発行 毎月1回15日発行

郷土を愛する人々の雑誌

神戸っ子

10
月号



IRIKAI SO

monthly magazine kobekko october 1964 no, 43

*For the best
Mikimoto Pearls
of course*

The Originator of Cultured Pearls

K. MIKIMOTO, INC.

KOBE STORE

Kobe Int'l House, Sannomiya

OSAKA STORE

Shin Osaka Building, Dojima

MAIN STORE : Ginza, Tokyo

TAX FREE FOR TOURISTS



世界で自慢のできる
日本の宝石は
〈ミキモトパール〉です
選びぬかれたつぶよりの
ミキモトパールが
あなたを気品で包みます



御木本真珠店

神戸店

三宮・神戸国際会館 Tel. 22-0062

大阪店

堂島・新大ビル Tel. 363-0247

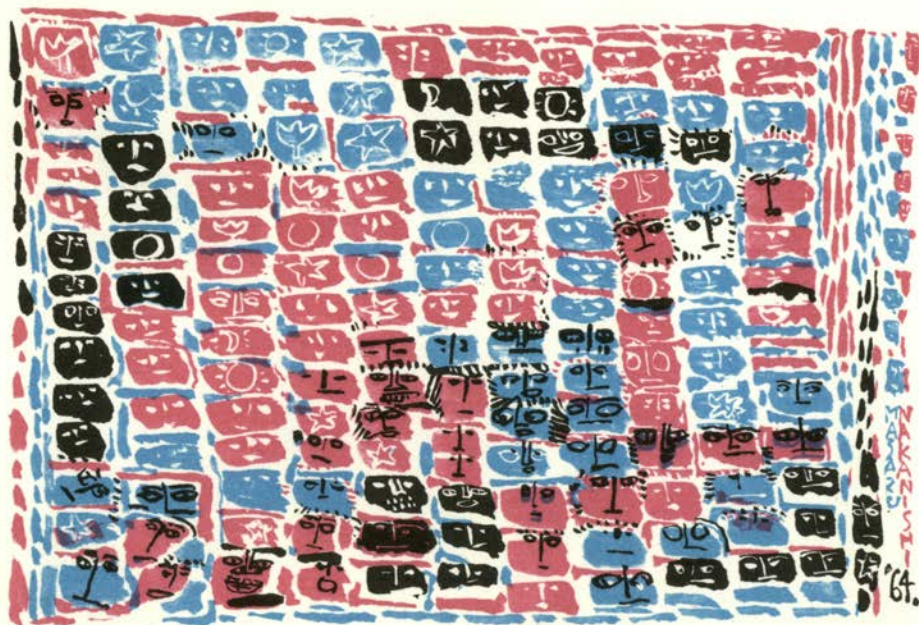
本店=東京・銀座四丁目

これは神戸を愛する人々の手帖です

あなたのくらしに楽しい夢をおくる

神戸を訪れる人にはやさしい道しるべ

これは神戸っ子の心の手帖です





PEARLS by TASAKI

田崎真珠店

- 三宮店：新聞会館秀品店内
- ニューポート店：ニューポートホテル内
- 東京パールファーム：東京・赤坂溜池2
- 銀座店：東京・銀座並木通
- ヒルトン店：東京・ヒルトンホテル内
- オータニ店：東京ホテルニューオータニ内
- 羽田店：羽田・東急ホテル内
- 札幌店：札幌・ホテル三愛内

あなたの秋に

タサキパール



われら
神戸っ子

15

なが たに はる こ
永谷晴子
灘神戸生活協同組合理事

現在の神戸生協は、会員が7万5千人の大世帯、そのなかの婦人の指導者。『暮らしのなかの経済学』、『消費教育』など、上手なお買物や家計指導にあたっているらしい。『一家をもつて、しっかり家庭を守る主婦』がほんとにいい主婦だといえましょう。暮らしのなかで生活を守って行かなくてはならない一番大切なこと、身近な生活の科学とでもいいたしうか。上手なお買物や、家計簿の研究などを若い人たちのなかにはあって、ささやかな私なりの経験を生かして話っています。主婦たちの生活相談、消費指導、各種の講習会、組合の企画から運営まで、ギッシリスケジュールです。柔和な人柄は、そんな激しい活動家に見えない。しかし自宅で憩われるひとときも仕事は手離されません（永谷さんの書齋で）

撮影／西村雅司



タジマの目を選んだ
の宝石の名品！

オパール (Opal)

2-2.20 成分 含水珪酸 含有水分
キョーパール(乳白色) オーストラリヤ
ール(透明) オーストラリヤ ブラック
) オーストラリヤ メキシコオパール

Tajima
宝飾店 タジマ

元町2・TEL 33 0387・2552

なか
中巻
まき
ひろし
兵庫日産自動車K・K専
務陶芸美術品蒐集家

古丹波焼を時代別に体系的に集められている。見事な蒐集である。―僕はサラリー・マンとして楽しめる範囲で集めたものなんです。陶芸や美術品にひかれるようになったのは、先代の嘉納治兵衛さんが白鶴美術館をつくられた時、お手伝いさせてもらったのが、きっかけです。古丹波は非常にいいものだが、比較的に開発されていなかったし、せめて郷土のものと思って集めたはずにしても、何百年も経て遺されたもの、それも、愛されて遺る生命力は偉大だと思う。僕は商売も同じことだ、いつも愛されてこそ商売になるといってます」

(日産ドライブコーナー応接室にて)

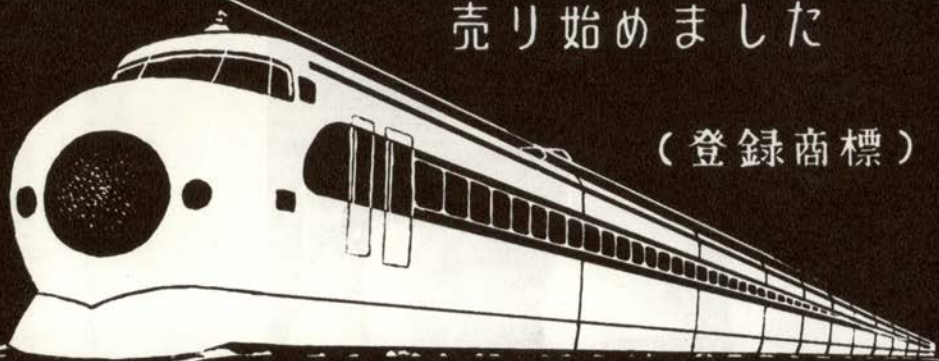
NAGOYA

TOKYO

ヒロタは新銘菓
世界に誇る夢の超特急を

売り始めました

(登録商標)



HIROTA

元町店 元町3丁目 ㊟2340 三宮店 新聞会館秀品店 ㊟2312
㊟3523

KYOTO

OSAKA



10月号目次

Second Cover/絵・中西 勝	41	暮しのバラエティNo.8・きもの
グラビヤ/われら神戸っ子・撮影/西村雅司	3	パリ通信(2)/ノミの市・佐藤 昭
⑤永谷晴子 ⑥中巻 弘	49	座談会①神戸の文化をどうするか/細川隆一郎
わたしの意見/木下 繁	9	岡部伊都子・君本昌久・貝原六一・柴田隆弘
随想3題/倉敷随感・南部知伸/美術館開設への希望・元永定正/あゝ川野彰子さん・陳舜臣	10	53
随筆/名を知らぬ花・若杉 慧	14	座談会②道化座15年を迎えて/田島 博
連載随想第27回/ラッキョーとホテル・白川 渥	16	夏目俊二・阿木五郎・鳴尾よね子・岩嶋道枝
ヨーロッパ“気楽”な旅(その2)	63	神戸を楽しむ私のコース③/内海 元
オリンピックメダル 古林喜楽	18	64
ずいひつ/神戸と阿波踊り・内村直也	20	神戸遊戯誌14/ヨット③・青木重雄
神戸っ子放談/野沢幸三郎	23	66
経済ポケットジャーナル	26	神戸うまいもん巡礼 No.26/赤尾兜子
るぼろたーじゅ・コウベ③東部埋立地/松原新一	29	68
オリエンタルホテル・ア・ラ・カルト(その4)	35	紳士入門②/買い物紳士・竹田洋太郎
映画のこと手当たり次第⑨/淀川長治	36	70
こんにちわ船長さん⑤/フランクフルト号船長	38	ポケットジャーナル/花時計/はいからコーナー
きく人・王奥 章	38	72
		Kobekko Shopping Guide
		連載・第18回/神戸夫人・武田繁太郎
		82
		愛読者サロン・編集後記
		84
		グラビヤ/神戸の月 カメラ・緒方しげを
		表紙/小磯良平・撮影/米田定蔵・レイアウト/橘正三

Fahrenheit's

ドイツ菓子

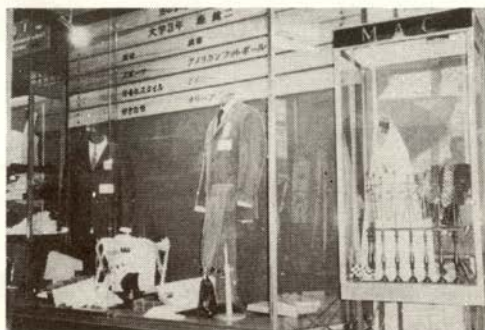
吟味された材料に洗練された技術を加えて“生”の持味を十分に生かしたお菓子です。

ピラミッド
ビスケット
各種ケーキ
各種詰合せ

工-ハイルム

本店・三宮生田神社西隣
三宮店・大丸前市電筋
神戸そごう・神戸三越・神戸大丸
国際名菓・その他有名百貨店

男の衣服設計図



10月————→

マック4店に於て「男の衣服設計図」をタイトルとして秋冬の商品を揃えました

この秋の皆様の服装プランをマックのウインドウを見てお決めください

Oct $\longrightarrow$

男の服飾



三宮本店	神戸センター街 TEL ㊟ 0895
トアロード店	センター街西口 TEL ㊟ 0896
新開地店	新開地本通り TEL ㊟ 7688
姫路店	姫路駅デパート TEL ㊟ 1261

＊わたしの意見

歴史教育の

すすめ

木下

繁（兵庫新聞社長）



台風20号は、神戸にも大きな損害を与えましたが、台風のみでなく、自然の暴威による災害の起るたびに、対策の不備が嘆かれるのが、日本の習慣です。それは当然のことでしょうが、私はそのような災害にもひとつの意味を見出したいと思います。

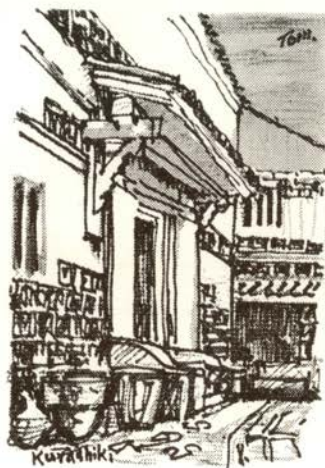
つまり、災害もまた、ひとつの貴重な試験だったとはいえないだろうか。災害によって痛めつけられた状態から、立ち直ろうとするエネルギーこそ日本を支えてきたものではなかったかと。つまり、私どもは日本人というものをもっとみつめ直し、考え直すべきではないかと思えます。せんだってテレビで、中学生による討論会があり、たまたま私もそれを聴いていたのですが、そのとき愛国心の話題が出ました。すると、ある中学生が「愛国心というのは、戦争のときにだけ必要なんでしょう」と発言したのです。これには驚きました。いや、むしろあきれてものがいえないという気持でした。

いったい今の教育のもっとも大きな問題は、歴史教育の欠如だというのが、私の考えです。日本民族のエネルギーが、どのようにして今日の日本を築きあげてきたのかを、現在の教育は教えていないように思われます。しかし、歴史を知らずして、自己を知ることでもできず、また愛国心も生れてはこないのです。なぜなら、歴史こそ自己を見る鏡だからです。毛沢東が、あの広大な中国を統治しえたのも、彼がマルクシズムという理論によったからというより、自国の歴史を深く研究したからなのでその意味で彼は、類いまれな大戦略家だといえます。

私が愛国心を説き、歴史教育の欠如を嘆くのは、必ずしも皇室中心主義を主張したいからではありません。私は徳川時代以後、文化的、経済的方面に見事なエネルギーを発揮してきた庶民のちからに注目したいと思うものです。そういううちからが、日本の歴史を形成し、明治の開国に対処して誤まないだけの民族のちからになったのだ、ということを、若い人々に教えるべきではありませんまいか。

倉敷という街はまことに不思議な街である。大原美術館の前に立って、緑深い堀割越しに船倉屋敷のたたづまいを眺めていると、いつしか自分自身が芝居の舞台にでも立っているかのような錯覚に陥ってくる。あたりは森閑としていて、何か開幕寸前の静けさを感じさせる。倉敷の夕暮はそんな雰囲気を持った街なのである。

倉敷随感 南部知伸



× × ×
夕刻の街を散歩に出て、末の娘に蘭草（いぐさ）で織ったハンドバックを求める。大阪や神戸の街中でも、よく見かける代物だが、ここに來てその一つを取り上げて娘に持たせてみると、それは眼にしめるように可愛く見える。赤と濃紺の色調がこれまでにない新鮮さを感じられ、蘭草の香まで若く

ながらに数多くの街の絵を描きつけて來た自分にとっては、矢張りユトリロやシスレーや或はラファエリの作品におのづから自分の魂を奪われて仕舞うのである。街はこんなに美しくとも而かもこんなに淋しく、街はこんなにうらぶれていても而かも私の人生のすべてがこの中にある。いつしか私はユトリロとその絵の前で心の底を打ち明けて話すのであった。

× × ×

別館に來て河合寛次郎や富本憲吉や浜田庄司の陶芸品の前に立ち、私は又家内や娘と一緒に倉敷の街に立ち戻ったように感じた。すべての世界は一転して素朴な庶民の芸術の中にひたっている自分を発見した。恐らくはバーナード・リーチも我が国に來て、日本古来の民芸品に心を奪われたその瞬間に彼は最早異国の人ではなくなつたであらう。リーチの見事な額皿や壺の一つ一つに、日本的感傷の釉薬が涙のように流れているのを見た。

× × ×

日本の純粋とヨーロッパの華麗が混然と一つの調和をかもしている美しい街、倉敷。私はこの舞台の花道をおりて静かに神戸へ引き返すのである。 三九・九・十六

（阪神百貨店社長）

× × ×
棟方志功の壁画を観ることも今回の旅の一つの目的だったから、私共は倉敷国際ホテルに宿をとることにした。建物が新しい上に、このホテルのロビーに高々と描かれた志功独得の版画調壁画の白黒のコントラストが、このホテルの空気をひとしお清潔にそして高雅なものに引きしめていたことはまことに嬉しい限りであった。

香ってくるように思われた。

× × ×

何回か訪れたことのある大原美術館ではあるが、いつ來てみても心打たれる感動があふれている。グレコの「受胎告知」にも、ローレックの「婦人の像」にも、尙言い知れぬ愛着を覚えるけれども、都会に生まれ都会に育ち、その生活との密着ゆえにどうしても立ち切ることの出来ない感情から拙い

旧兵庫県庁舎が、美術館にころもがえするという。いい計画である。それが実現すれば、絵を描く者の一人として、たいへん幸福なことだと思う。

私が、かねがね羨しいと思っていたのは、長岡現代美術館である。これを建てたのは、駒形十吉さんという個人であるが、長岡といえ、神戸とは比較にならない

美術館開設への

希望

元 永定 正

小さな田舎である。そういう所で有能なコレクターが、私財を投げ出して美術館を開設したという事実に、私は深く心を打たれたのだ。兵庫県にしろ、神戸市にしろこの壮举を見ならうほどの奇特の人はいないものか、というのがまえまえからの私の願いであった。兵庫県にだって、コレクションの趣味をもった人物がいないわけではない。ここにその名を出す

のは控えるにしても、現代美術のコレクターだけでも5、6人はいるはずである。そういう人が一緒になって、美術館をつくってもらうのが、ほんとうはいちばん望ましいことなのである。

といって、旧県庁舎を美術館にという構想に、ケチをつけようというわけではない。くり返せば、それは私ども美術家にとっても、



県民一般にとっても、たいへん幸福なことである。ただ私は、県の当局者に、いったいどれだけの熱意と真剣さがあるのか、一抹の疑問を抱かざるをえない。金井知事は、先だって県民室に絵を展示しようとして語っておられた。この案自体を悪いとはいわない。しかし、私があるたりぬと思うのは、知事さんが金を出して絵を買おうとはおっしゃらぬ、そのミミツチさで

ある。予算がないから、絵を借りて県民室に掲げる、というのでは少なくとも私一個としては困るのである。文士が文を売ることと生活しているように、画家は絵を売ることと暮しをたてていくほかない以上、絵を暫時無料拝借いたしますといわれても、それはちよつと困るのである。そんな下世話な事情をぬきにしても、やはり絵は金を出して買うのでなければウソである。つまり、タダでもらった絵よりも、金を出して買った絵の方が、ずつと真剣に鑑賞する気持をおこさせるはずだからである。だから、予算がないから……という逃げ口上をいつまでも弄するようでは美術館開設案も、さして実質のある計画とは信じられぬのである。

もうひとつ注文をつければ、仮りに美術館が正式発足することになった場合、そこに展示する美術作品は、なんといっても『現代美術』を中心にしてもらいたいということである。今さらもう古い作品にしがみつくこともあるまい。長岡の美術館にしても、半分は現代美術である。新しい美術とその担い手を育てていくためにも、そうあってほしいものだ。

以上は当局の人々へのささやかな願いごとである。(洋画家・具象美術)

小説現代の十一月号に川野彰子さんの遺稿「雪化粧」がのっている。計報は校了ギリギリだった。特に紙面を工面して編集長が自ら筆をとって「川野彰子さんの急逝を悼む」という一文を添えている編集長の三木さんは、書きたくなかった、と述懐していた。

追悼文はとかく筆の進まぬもの

なにを書けばいいのだろうか？

書けばくり言になるのにきまっている。今年の夏も恒例の8の会がひらかれ、川野さんもその招待状を受けとった。

「どんな会ですの？」と彼女から電話がかかってきた。川野さんはバイキングのふるい同人で、文学歴はすいぶん長い、全国誌に

換にいいですよ、と説明すると、

「陳さんがおいでになるンでしたら、わたしも行きます」ということになって、阪急三宮西口で待ち合わせる約束までした。

ところが、当日私は急に黒部へ行くことになったので、川野さんにそのことを電話すると、それなら自分も行かない、とおっしゃる彼女はそんなふうに見知りをするようなところがあった。

「田辺聖子さんも行かれるから」とおすすめたので、やっと参加する気になったらしい。その田辺さんからきいた話では――

会場では、川野さんは、田辺さんと三好さん（群像小説新人賞）たちと一しよに、その晩を愉快にすごしたそう。御婦人が三人集まると、あらゆる話題が総ナメされるようだが、たまたま健康の話になって、

「このなかでは川野さんが一ばん長生きしますね」という意見が出た。すると、万事につけて謙遜な川野さんが、この問題については、（ソラ、アタリマエヤワ）といった顔つきをしておられたときく。

健康そのものだった川野さんがその長生き問答の僅か一月のうちにこの世を去ろうとは！

（作家）

悼川野彰子君

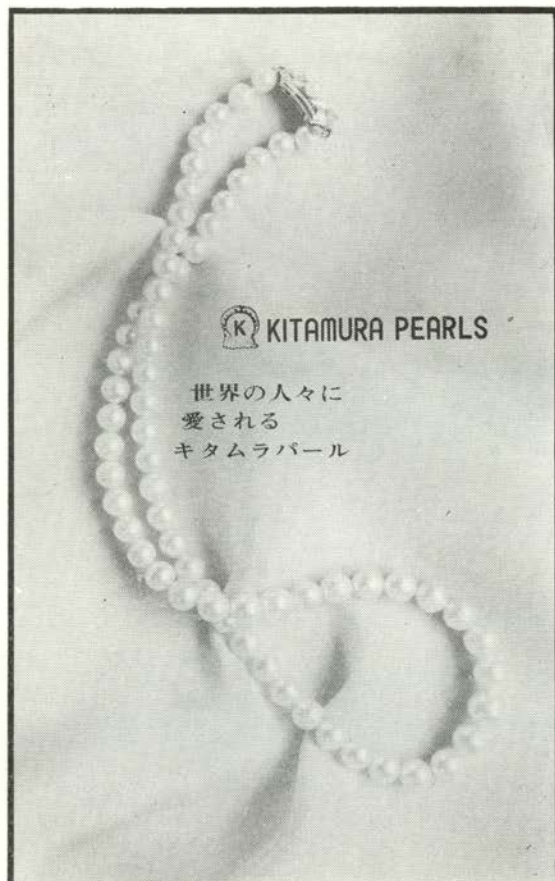
讀君遺稿更成愁
寂寞斜暉臥不休
筆硯塵封清怨絕
多少玉珠帶恨留

ああ
川野彰子さん
陳舜臣

だ。私も神戸、読売の二紙に川野さんの追悼文を依頼され、これが三度目である。代議士が死亡すれば、議会での追悼演説は、同選挙区選出の議員がすることになっている。私に追悼の文章を書けと命じるのは、それに準じた考えからであろうか。それにしても、これほど書くのがかない文章はない

作品を発表しはじめたのは、私のほうがすこし早かった。この一日の長によって、川野さんから、よくこうした雑事についての質問や相談をうけたものである。

8の会は、白川渥、小磯良平諸氏が発起人となって、竹中郁氏の司会で文化関係者が夏の一夕をのんびりとすごす会である。気分転



 KITAMURA PEARLS

世界の人々に
愛される
キタムラパール

北村真珠株式会社

神戸：元町店 TEL 33 0072
オリエンタルホテル店 338111EXT.331
東京：スキヤ橋店 TEL (571) 8032



三恵洋服店

元町4丁目 TEL 34 7290

名を知らぬ花

若杉 慧

ひと夏この山の家に一緒にくらして「孫くたびれ」から「孫ノイローゼ」となる。広くもない家の内が先づもって幼稚園と動物園である。男の子には同時に三人の馬にもなつてやらなければならぬ。先後では喧嘩になる。七才と四才と三才いづれも数え年なり。にんげん生まれたとき既に一寸だからを、六十二才のおじいちゃんが背中に乗せて這いまわることが重労働である。フランス大革命時代に漫画に王様と貴族と坊主が老百姓の背中に馬乗りになった図があったが、人間のエゴのあらゆる形態がどの孫にも完全に具わつていて、それがもつともプリミティヴに發揮される好条件がこの山の生活では、家の内にも外にも揃いつてゐる。いっそ連日三十四、五度の熱さという水不足の東京で日常生活を送らせた方がよいのではないかと思われる。子供は大人以上に日常生活と非日常生活を使い分けることを知っており、

それも悪い方である。私の母がよく「寝た間が極楽じゃ」といいながら寝床に入っていたが私のいまの明暮がそれだ。

ゆうべは三時頃目がさめた。さすが天地寂せきとしている。妙に眠れなくなった。いつもだと来し方行く末を思案したりすることになるが、そうでなく当面何やら気にかかることが……そうだ、「神戸っ子」から手紙が来ていたはずと、ごそごそ起きて搜すと、返信用ハガキもそのままの二週間前の依頼状であった。

眼鏡—むろん老眼鏡—を孫どもの手のとどかぬ電灯の笠の上からおろして、机に向かう。夜中原稿紙に向かうなんてことのめったにない私のことだから、さて何を書くこうかと、冷酒をコップに七分目ついで来てチビチビ飲んでみると、遠く溪流の音がきこえる。昼間はどんな静かなときでもあの音はきこえないから不思議である。山にはい

ろいろ不思議があり、私はあの夜中にだけきこえる流れの音を蓼科七不思議の一つにかぞえている。「山川の鳴りも鳴らずもおのづからおのがまにまに世にしあるべし」と伊藤左千夫は詠んでいるが、巖の湯―現在の親湯だから、流れはすぐ枕の下であった。私の小屋はこの出湯を―山登った所にある。北に蓼科山を負い、晴れた日には南に駒ヶ岳、西に木曽御嶽、乗鞍岳、東に八ヶ岳を見る。「蓼科の山の奥がとおもいしをこは花の原天つ国原」これも左千夫である。また「天の原くしき花のみさばにしてわが知る花は少なかりけり」歌よみの左千夫にしてそうなのだから、私なぞは片っ端から知らない。自分勝手の名をつけ、私用蓼科草花図鑑をつくりかけたが、それもやめた。一つだけ偉くなった。すなわち、名を知った花よりも名を知らぬ花の方をよく観察することである。そして名を知らぬのが殆どだから、私はここ数年、名を知らぬままこのあたりの植物の通になつたつもりである。これは花ばかりではない。

「名を知らぬ」と「名も知らぬ」とではちがう伊藤左千夫と併称される長塚節は両つともこれを許さなかった。名のない草花なんて一本も無いというわけである。この態度は彼の詩の限界にもなった、と私は思っている。

私はいま「長塚節」を書いてゐる。四年か五年前だ。NHK朝の「人生読本」で私は第一朝「仙像を愛した人会津八一」第二朝「酒を愛した人若山牧水」第三朝「花を愛した人長塚節」を放送した。三朝目わが話を寢床で聞いていて、涙が出た。もともとセンチメンタリストである私にも妙な

な経験で、このときやがては小説長塚を書きたいと天下に公約したが、小説は何度やりかけてもうまく書けないので、素描長塚節ということにして、現在私の仕事としている。あれやこれやでましても中断しがちだが、この男とはもはや切つても切れぬ因縁のようなものを感じているから、そのうち何とか成るであらう。

節はわからぬ歌はうたうなと言った。文章に於ても同様である。彼は左千夫よりも茂吉よりもはるかに透明である。水彩画的である。しかし彼にも彼なりにわからぬ部分はある。それは彼自身にもわからず内部に包蔵していたもので、そこを私は書きたいのだが、そこがなかなか書けない。

副の仕事のつもりでいま「島尾敏雄」を読んでいる。この男もわからない。尤も彼とはこの春九州方面を一週間一緒に旅して、多少わかった。家族ぐるみの彼の奥行、それから彼独特のスタイルのリアリズム―そんな言葉があるかどうかしらないが。

ゆうべは、隣の部屋の子どもの小運動会、蒲団をマットにしての大騒ぎをききながら、「勾配のあるラビリンス」を読んだ。そんな読み方は作者に不本意であろうが、湊川公園から会下山、夢野それから宇治川、南京街の麻薬くさいあたりの「非超現実主義的な超現実主義的」風景の中を、ぐるぐる引っぱり廻されているうち、いつしか眠らされた。

夜半に目がさめて、「神戸っ子」からの依頼がふつと思いだされたのも、そのためかもしれない。

蓼科にて 八月二十日 (作家)

ラッキョーとホテル

白川 渥
え・中 西 勝



先頃オリエンタルホテルの新築披露の催しがあった時、デラックスな客室を拝見しながら、ひょいと浮かんた話。――人の心はきまぐれに飛躍するものである。対極反応と言うやつかもしれない。

×

戦前、役所勤めをしていた頃、県下のあちこちを旅行する機会があった。学校視察の用向きなので、ずいぶん辺陲の村へも行った。そんな仕事を五、六年もつづけていると、いつかあちこちになじみの宿が出来る。ひょいと浮かんたのは、篠山東の野趣満々の山の宿とそこの老夫婦の顔である。同じ旅人の寝床ながら、この高級ホテルのムードとはあまりにも隔絶が甚しい。

当時、そこは農閑期の村人たちが骨休りする湯治場で、その季節さえ避けてゆけば、めったに相客とぶつかることはなかった。板葺きの屋根に荒障子。むろん電灯もまだ来ていなかった。客の少ない季節には幾日でも雨戸を締め切りという閑散さ。その宿に心を惹かれたのは、はじめて泊った時、軒すれすれに啼く山ウグイスの声を聴いてからだ。その後は、丹羽地方に出張するたび、少々

の不便をしのんでもここを根城に学校廻りをしたものである。

宿は老人夫婦の経営だが、客の世話はもっぱら婆さんの仕事で、爺さんの方は別に猟とか炭焼きとかの副業がある風だった。

ところで、この老夫婦、よほど相性のわるいと思えて、しばしば派手な喧嘩をはじめた。どちらも地声が高いので、土間一つ隔てた二階の客間へ原因から終末までが筒抜けであった。

ある時、私に出したお膳のことから一戦がはじまった。その日、ちょうど婆さんの方は麓の村まで買出しに出た留守で、爺さんが私の膳ごしらえをしてくれたのだったが、原因はそれに附けた漬物物のラッキョーにあった。

宿の料理は、冬分は猪やツグミが出たが、ふだんはせいぜいヒモノの類で、それにコウヤの煮付けと山草の漬物。乏しい食卓の中で、その漬物だけがこの家の自慢だった。ウド、ワラビ、フキから、ミソ、ミョーガの類まである。とりわけ細い山ゴボウの味噌漬けなど、ポリポリと歯切れがよく、ちょっとオツな風味であった。

が、どう言うわけか、私はラッキョーだけは嫌いだ。あいつが二、三個お膳のはしに添えてあるだけで、もうムカムカと途端に食欲が消えてしまう。匂いだけではない。列車の中などで、ラッキョー頭が腰かけていると、たとえそこに空席があっても寄りつかぬことにしている。

私のこの奇癖については、婆さんの方は先刻諒承済みだったが、何もしらぬ爺さんはむしろ鼻高々と、

「へい、こいつは三年ラッキョーでしてナ」

と、琥珀色の小粒を小皿に盛って差し出したのだ。私は少なからずギョツとしたものの、これが今夜の最高の御馳走とあれば、せっかくの好意を無下に却けるわけにもゆかず、爺さんの隙をみて二つ三つチリ紙にくるんで袂にしまい、さも賞味したかの態で食事をすましたところへ、婆さんが帰宅したのだった。

「爺さん、これ何じゃいね！」

婆さんは、くだんの小皿を見るなり眼をとがらした。

「何じゃいねって、何じゃいや」

「ラッキョーじゃがナ。……あんた、アホかいな」婆さんは高飛車にいきまいた。「あんた、この旦那をいつからの客やと思うとってん。ほんにアホや！客の好き嫌いの呑み込めんで。……あの旦那、かんにんしておくれやすエ」

「こら！何がアホや。ちゃんとラッキョー上がってとってやないか」

「嘘言いな」「いいや、減つとる！」

爺さんが皿のラッキョーをのぞき込んで、怒鳴り返した。

「三つ減つとらいや！」

たしかに、私がチリ紙に包んだのは三つである。さては、爺さん、ラッキョーの粒を勘定して出していたのか。この山の宿では、それほどに貴重な料理だったのか。

×

オリエンタルホテルのパーティで、豪華な料理をつつきながら、あのささやかなラッキョーの皿が浮かんでくるのを、私はどうしようもなかった。

(作家)